

祖父へ、いつもありがとう

諫早市立長田中学校 二年 大柴 伊織

私の祖父はあと少しで八十歳をむかえる。それなのに祖父は、少しの間休息をと。たらすぐには田んぼに向かう。休んでいるのが落ち着かないらしい。まるでマグロのような人と。と少しあきれた口調で祖母は時々つぶやく。小学校五年生になった頃の話だ。長田小学校では五年生になると、総合の学習でお米づくりをする。普通のお米ではなくもち米だ。

苗植えから脱穀以外の作業を全て手作業で行った。もちろん田植えもだ。そこまで広い田んぼではなかったし三十人以上で一斉に作業すればそこまで大変ではないだろう。そう甘く見ていた自分かいた。いざ、実際にやってみると田んぼは思った以上にぬかるんでいて足は自由に動かすことはできなかつたし腰も痛かった。バランスをくずして尻もちをついている友達も何人かいた。私は自分か年を重ねてしまったよな気が

がした。また十一歳の頃の私でも腰が痛かっ
たのだから祖父たちもよほどだろうと思っ
た。今は、手作業ではなく機械を使っている
家庭が多いはずだ。しかし機械ではできない
端の部分などは祖父と祖母の二人だけで手作
業でやっている。三十人以上でもきつかった
のに二人だけとなるとどれほどきつくて大変
なのだろう。私には想像がつかないほど辛い。
祖父と祖母はよくロキソニンテープなどを張
っている。その姿を見るたびそこまでして
作ってくれているなんて感謝しきれない。
と思う。こんなに辛く苦しい作業を私たちの
年齢よりもはるか上、いや倍以上ある祖父た
ちが汗を流し、体を痛めながらもかんばって
くれているのだ。私は感謝の言葉だけでは足
りないと思う。祖父はどうしてこんなに辛い
百姓仕事を続けられるのか疑問に思った。だ
から確かめるために聞いてみたことがある。
「収穫できたときの嬉しさもそうやけど、一
番は家族の食事を支えるのが俺の仕事やっけ

んがやろうね。
と答えてくれた。その言葉を聞いて家族のこ
とをちやんと考えて働いてくれているんだな
あと思った。

ごはんを食べた私が「おいしい！」と言
と祖母も祖父も嬉しそうな顔をする。その顔
が私は好きだ。この感謝をときれないならし
きれないなりに自分の「おいしい！」という
言葉を素直な気持ちで伝えていきたいと思う。
毎日家族みんなできうしてごはんが食べれる
のはみんなのおかげであることを忘れず感謝
の気持ちを持って食べていきたい。

「今日もおいしいごはんをいただきます！」